

水牛通信

VOL.4 NO.5
毎月1回・10日発行
定価 200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

女性人権の歌 31

自由なる労働家 31

奪われし野に春は来るか 30

農民歌 30

その日 29

小さな蓮池 28
楽譜

光州5月 コンサート解説 26

光州5月 コンサートプログラム 25

水牛楽団のページ 24

上野駅・サーカス・筑豊で会った人たち 本橋成一

上野駅・サーカス・筑豊で会った人たち

本橋成一

どこにでも坐って待てるというのが、上野駅を撮りはじめていちばん感じたことですね。東京駅や新宿駅には、こういう人、いないでしょう。あのネ、上野駅にも正式の待合室があるんだけど、五十坪ぐらいのがひとつだけ——それだけなんです。それで、日に七十五万人いるのかな、乗降客が。

去年の暮れ、あれは二十八日だったかな、コンコースのすみっこのとこにいてみると、おとしいた連中とおなじなんです。「なんだ、また会ったじゃないか」というと、「お前、まだ撮ってんのか」なんていって……。それはおなじ土地からきている連中なんです。東京ないしは東京近郊にでかせぎにきている連中が、毎年二十八日、バラバラに切符を買ってあつまって、そこでお酒をのんだりして、またバラバラに列車にのって帰っていくんです。

駅が広場になっている。つまり管理する側がつくった駅じゃないんですね。駅を管理する側から合理化しちゃうと、空間がせまく入りこんできてしまっ、案内板だけがバカでっかくなる。そういうんじゃない、ぼくの友だちの建築家がいってただけ、上野駅のコンコースのまんなかに立つと、どこで切符が買えて、どこが改札口か、どのホームでどっちの方角に帰るかが、すぐわかるでしょう。この広い東京のなかで、自分の位置がはっきりわかる唯一の場所——それが上野駅なんじゃないですか。

いま、十九番線側の地下四階に新幹線の駅ができてるんです。もつと天井が高く、明るくなるわけです。そこではたして、このおばあさんが新聞紙をひいて坐れるかどうかですよ。だめだと思っただけです。





これが「棒おじさん」——ぼくがつけたアダ名なんだけど。上野駅には何人か、ぼくも顔みしりの住人たちがいるわけだけど、そのなかの名物男ですね。

年齢は六十前かな。でも見た眼よりは若いのもかもしれない。この棒は、ぼくがはじめて会ったところは木の棒だったんだけど、それがプラスチックになって、最近アルミの棒になった。それでコーラの販売機とか、そういうところの下におちてる硬貨を、ピッピッとほじいて拾うんです。最初、いっしょについてまわったけど、かなり神経をつかっているんですよ。駅員や公安におこられたりするから。

この「棒おじさん」が、去年の十二月十七日かな、つかまっちゃったんです。

終電がでたあと、シャッターをおろすと同時に、そのへんにたむろしていた住人たちを、江東区の区役所の職員と公安とおまわりさんと、それから地元の内会と駅の関係者と——総勢二十何人がつかまえて、施設に送りこみます。ところが情報がつたわるのがすごく早いですよ。駅員がシャッターをしめようとすると、住人たちが「今日、やるんだらう？」って……駅員は一所懸命とぼけるんだけど、みんななくなっちゃった。

結局、とっつかまったのは「棒おじさん」と、もうひとり、太った中年の女性だけ。それが可愛いんだな。駅のそばの映画館のわきで、看板のかけにフトンをして、二人でだきあって寝ていて、それでとっつかまっちゃった。だから、ひよっとして、おじさんも手入れのあることはわかっていたんだけど、おばさんとの約束がその日にあたっていたんで、とっつかまるのを覚悟であいびきしてたのかもしれない。

これは十三番線ですね。津軽三号。青森県の中津軽からきた坊やたちで、毎年あつまって帰るんですって。左の子、頭にソリを入れていて、髪の毛を茶色に染めているんですよ。それで、「カッコいいね、いくらかかったの?」と話しかけたら、「何千円もかかったんだよな。でも、おふくろ、びつくりするだろうな」って——ハッハッハ。

十七か十八かな。吉田君っていったけど、写真を送ってやったら、もどってきちゃった。中学をてたか、高校中退か、そのどちらかでしょうね。

上野駅の構内でよく見かける光景なんだけど、カバンや靴をとりかえて帰るんですよ。あそこらへんのデパートの靴屋さんで新品にはきかえて、古いやつをとっというもらうんですよ。そして正月あけにもどってきて、それをひきとっていく。ハレのスタイルなんです。このカバンだってそうかもしれない。ピッカピッカですもんね。

上野駅をきちんと撮りはじめたのは、おとしの十月からです。さっきもいったけど、ぼくは上野駅は東京で最後にのこされた広場なんだろうと思う。その広場をどうして失くしてしまうんだろうというのが、つぎのページの写真です。

十九番線のいちばん奥のところなんですけど、風がはいってこない。だからこの新幹線の看板が立つまえは、みんな新聞紙やビニールをして、酒をのんで待ってた。とてもいい場所だったんですよ。改札口のなかでは、それがこの看板ができたら、とたんにみんな立って待つようになっちゃったんですよ。ふしぎなもんですよ。この完成図ひとつで、居心地がわるくなった。まア、かんぐりすぎかもしれませぬけどね。



柳軒橋上野地下鉄を建設中
店々と、明るく作ります。





ぼくがサーカスを撮りはじめて、最初に仲よくなったのが千代子姐さんなんです。はじめのうち、緊張して「写真を撮らせてください」ともいえないでいたら、彼女のほうから話しかけてくれて、自分が可愛がっているブードルをうつしてくれというんです。それがきっかけです。肩芸のすばらしい芸人ですね。

千代子姐さんの生いたちや半生記といった話がおもしろかったな。二歳のとき母親と死に別れて、二十歳でサーカスにはいったけど、十年たつて、ようやく肩芸の稽古をやらせてもらえるようになったとか、男とのゴタゴタとか、足抜きとかリンチとか、ホステスをやったときの話とか、いろいろあるんです。

ところが、その話が日によってちがうんですよ。たとえば、千代子姐さんがいちばん想っていた男が病死したという話を、もう涙をながさんばかりに話すわけです。ところが何日かたつておなじ話をきくと、こんどは、その男が千代子姐さんを捨てたということになる。「へん、あんな男なんて」というわけです。ききがきをつくるために、いっしょに話をきいていた鎌田忠良さんなんか、そのたびに「このあいだとちがいます。どっちがホントですか!」といきりたつんだけど、ケロツとしている。

千代子姐さんにとっては、どの話もホントなんだろうな。はじめは驚いたけど、だんだんそう思うようになりましたね。

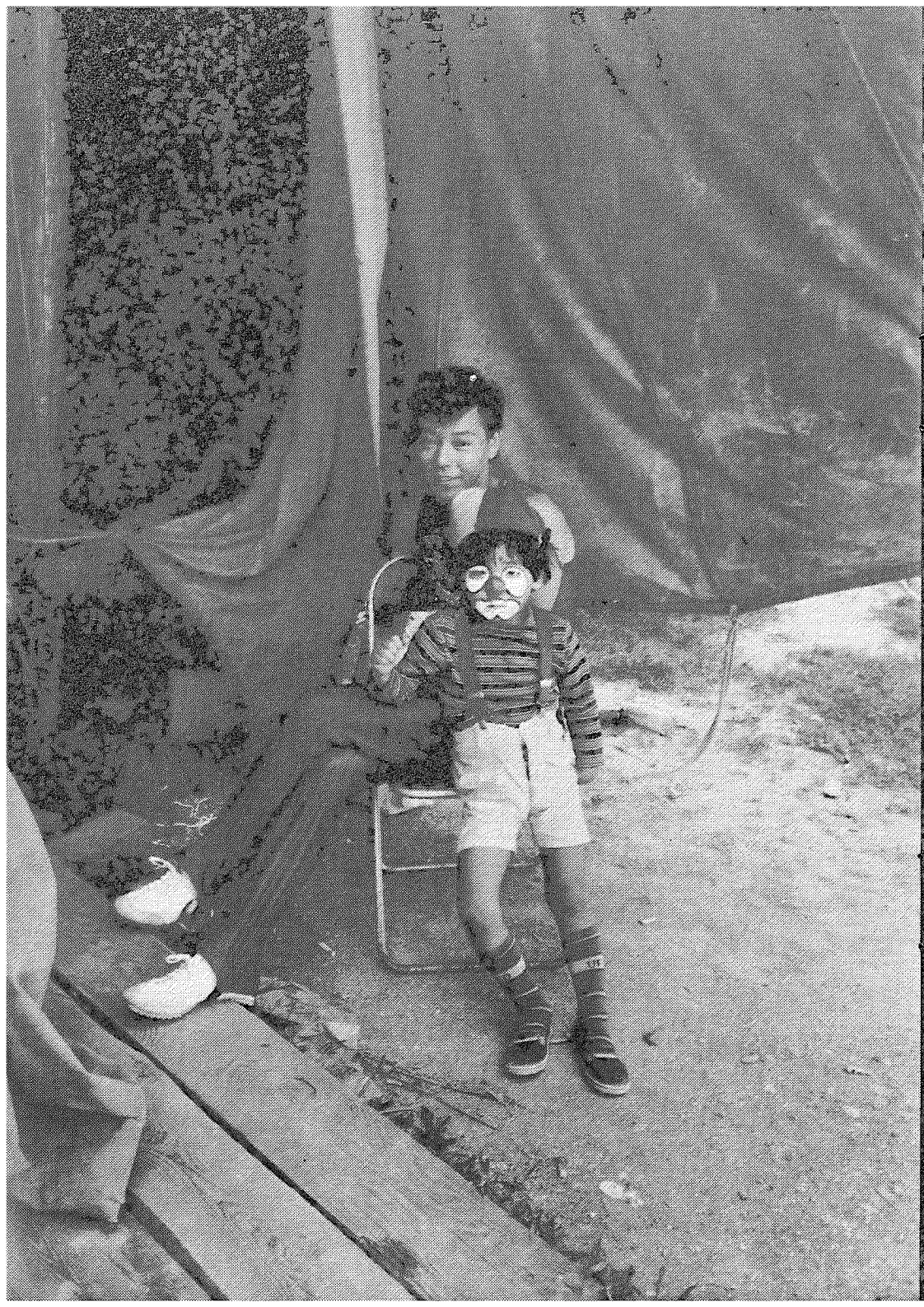
その後、彼女は年下の運転手といっしょに別のサーカス団にうつって、そのゴタゴタで半年間かな、舞台上立つことができず、そこの初舞台で、差していた竹を足の指の上におとして、結局、サーカスをやめちゃったんです。いまは甲府にすんでいますよ。

Yさんは奥さんと子どもと三人で、二十五歳をすぎてから、サーカスにとびこんできた。サーカスがすきだからというよりも、要するに食えなかったんでしょね。それでブランコをテントの空間いっぱいにする芸をマスターした。これは単純だけど、なかなか派手な芸なんです。

この写真では見えないけど、かれの左腕にちっちゃな刺青があるんですよ。なんか花の刺青でしたね。かれもあんまり気にしていないらしく、あんなり手ぬきの刺青なんて、ほくも「こういうものは値切っちゃいかんよ」とからかったりしてた。

ところが、ある日、楽屋にいくと、アルバイトで道化をやってる若い役者たちのドールンで、かれがその刺青を塗りつぶしているんですね。肌色のドールンで。高いブランコの上の芸なんだから、小さな刺青なんか見えるはずがないのに、いやな歴史があったんだな。それを見てから、ぼくはかれと刺青の話ができなくなったんです。この子どもがサーカスがすきでね。はじめは客席にいて、チャレンジ・コーナーとかいって、司会者が「さア、お子さん、元気よくてきてください」と呼びかけると、とびだしていく役をやってたんです。サクラですかね。四、五歳のところで、トランポリンをやるんです。ところがあまりうますぎるんで、すぐにバレちゃうようになって、そのあとはこういうメイクをして、一輪車ショーにもチョコッと顔をだすようになった。

だけど児童保護法というのがあってしょう。小学校にいくようになって、はたらけなくなっちゃった。歌舞伎の御曹子は堂々とやってくるのに、サーカスはダメなんです。



須磨子さん。彼女はもうつぶれた山根サーカスの末娘で、お姉さんたちといっしょに、契約芸人として矢野サーカスにでていた。そのとき、チエコから熊をつかう芸の一家がきていて、そのアシスタントの青年と仲よくなつて、求婚されたわけです。

お父さんは古い人間ですからね、サーカスの。「赤い国のやつなんか」と、ぼくのところに電話がかかってくる。「お父ちゃん、いまは赤いもなにもないよ」と説得して、たまたまチエコ人のチハコーバさんを知っていたんで、彼女に通訳してもらつて話しあいをしたんですよ。須磨ちゃんのほうは「日本に骨を埋める覚悟はあるか」の一点ばり。チハコーバさんもうまく通訳できないで、頭をかかえていたな。

骨を埋める覚悟があるなら、あたしもチエコにいつてもいい——そのことを一所懸命かれましたよ。とすうとすうとすうとすうと、なかなかかれにはわかんないわけです。ことばのせいもあるし、あまりにも日本的すぎて。

彼女はあまり芸をもっていないんです。山根サーカスがつぶれたとき、彼女はまだ子どもでしたからね。そのあと、家族といっしょにキヤバレーでフロア・ショーをやっていましたから、アクロバットとか、お父さんのハシゴ芸のアシスタントとか、そんなもんじゃないかな。

結局、二人はいっしょになつて、いまも矢野サーカスにいるはずですよ。かれのほうは、東ドイツからきている猛獣芸のアシスタントとか、そういうことをやってるんじゃないかな。仕事はいくらもありますよ。ましてやかれは猛獣をあつかつたから……日本にはちゃんとした猛獣芸がないんですよ。その意味では、ぼくらはかれに期待しているんです。







これは一九六五年ごろかな、筑豊の鞍手郡中山の悟平さんの一家です。父さんは「俺が死ぬまえに鉾山(ヤマ)が死んじゃったからのう」といって、焼酎のんで生活保護をうけていた。まへのページは三菱のボタ山のてっぺん。もうすっかり崩れてましたけどね。息子の静夫くんと妹の和代ちゃんです。お母さんもいいお母さんでしたね。

いちど感激したことがあるんだけど、お父ちゃんはいつも静夫をぶん殴る。でも静夫はお父ちゃんが大好きなんです。お父ちゃんには金があると焼酎をのんで、炭住の売店なんかで寝こんじゃうんですよ。それをこの兄妹が一所懸命につれもどすんだけど、なかなか家にはいらないうでしよう。そのうちに長屋の人たちがあつまってくる。そうするとね、静夫は洗面器に水をいれてきて、「行けーッ、見るなッ!」と、それをぶっかけるわけです。あのシーンは劇的だったな。ぼくだつてきつとそうすると思いますよ。いくらしようがないお父ちゃんでもね。お父ちゃんが小便したいといつてね。それでぼくがチャックをあけてやって、おチンチンつまんでやって——男のひとのおチンチンさわったの、こんなときはじめてだったな。「ホラッ、東京のお兄ちゃん、チンポコもたと、小便がズボンのなかにはいっちゃうから、ホラッ、もて!」といつて——まア、かなりの男だったな。

カンラク(陥落)といつてね、地盤がさがって池になると、春になると、鯉が卵をうみにくるんです。それを、父ちゃん、長い棒で刺すわけです。その名人なんです。早朝、てかけていくんだけど、ぼくもついでいったことがある。ホントにうまいもんでしたね。



酒をかつくらってないときは、万年ブトンにくるまって、一日中、本をよんでる。それが大三菱の坑夫だった悟平さんの現在の生活だったわけです。

あのネ、古本屋があつて、一冊十円だったかな、少年週刊誌を売ってるわけです。それを静夫に買ってこさせろ。その本のなかに、たとえばタイタニック号の沈没の話なんかがあつて、それを讀むと、船が沈んでも人が死なない方法なんかを懸命にかんがえる。桜島の軽石で船室をつくれば、船が沈んでも船室だけは浮くだろうとかね。その特許を役所に申請しにいくんだけど、どうもいつもダメだったみたいですね。

ぼくは九州には夜行列車でいくでしょ。それで朝つくと、眼がマツカなわけ。そうすると、お父ちゃん、「お前、このごろ肉をくつてないだろ」と。「どうしてだ？」と。とくと枕もとの本をさがして、「どれだったかな」とかいいながら、ライオンの話をひっぱりだしてくる。アフリカでは、年よりのライオンは狩りができないから、食いのこしの肉が、それもなければ草をくう。眼を見ればすぐわかる——つてそこにかいてあるわけ。ハッハッハ。それとおなじだつて。

それで、つぎにいったら、カゴのなかにニワトリを一羽飼つていて、「今日はお前に肉をくわしてやろうと思つて、待つてた」というわけですよ。「どうしたんだ？」つてきいたら、「おっこつてたから拾つてきた」つて。ハッハッハ。魚をとりにつかえりに、養鶏場からもつてきたにきまつてるんですよ。でも、うれしいですよ。ね、「拾つてきた」だつてさ。



このとき静夫は中学一年か二年ですね。当時、筑豊に児童センターというのがいくつかあって、いまでいう「落ちこぼれ」の生徒をあつめていた——そこにいたんです。この静夫が、つい最近、川崎で死んだ。公園の鉄柵に頭をガンガンぶつけて、そのあと包丁を買って、それで首と腹を切って自殺したそうです。割腹自殺ですね。川崎の路上で。

直接の原因はだれにもわからないらしいです。川崎では覚醒剤の売人をやっていたらしいですね。組織にはくわわらないで、何人か仲間ができたとき、つかまっちゃって、刑務所からでてきたら、その仲間たちが裏切っていたかいました。

中学をでたあと、浜松にとってもいい私塾があつて、しばらくそこにいたんです。そのころは大工になつて、父ちゃんに酒をのましてやりたいなんていつてましたね。そこをでて、あとはなにをしていたのかな。ともかくも、駐車場にとめてあつた車から仲間とサングラスをぬすんで、ぬすまれた連中とケンカになつて、強盗ナントカ罪で四年間、牢屋にいれられてしまったんですね。犯罪ともいえないくらいの小さな事件ですよ。それで四年間。

死んだあと、静夫の遺体は葬式がだせないで、解剖実験用に冷凍されていたようです。小さな箱のなかに、子どもころの教科書なんかがつめてあつて、そこからお父ちゃんの写真が二枚でてきた。ぼくがとつたものでした。

はじめの兄妹のこの写真を一九六八年にだした『炭坑』という写真集の最後に入れたんです。そしたら「子どもたちの明るい笑顔にすくわれる」といった人たちがいました。笑顔の裏にあるものがわからなかった。ぼくだつてそうです。

光州5月

5月17日(月)午後6時半開演 中野文化センター

5月29日(土)午後2時半 神戸学生・青年センター (078)851-2760

5月30日(日)午後2時半 大阪バナナホール (06)361-6821

映画「自由光州——1980年5月」(★)

鳥よ鳥よ 涙にぬれし豆満江

帰りたくて(★) 他郷ずまい

奪われし野に春は来るか 小さな蓮池

ソウルへゆく道 その日

農民歌 女性人権の歌

自由な労働者

林光「光州5月」

高銀「故郷」「臨終」

尹伊桑「間奏曲A」(★)

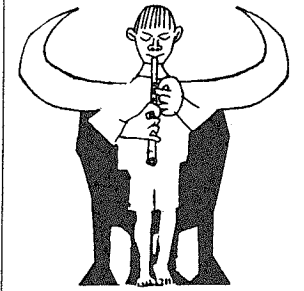
モンコン・ウトック「ロンパーズ」(★)

高橋悠治「まわれまわれ糸車」「さまよう風の痛み」「光州1980年5月」(○)

出演者 水牛楽団 林光(★) 水木陽子(★)

高橋アキ(★) モンコン・ウトック(★)

(曲目・出演者の★印は東京のみ、○印は神戸・大阪のみ)



水牛楽団のページ

モンコン・ウトックは五月なかばまで滞在することになったので、水牛楽団はその間は六人で演奏している。

三月二十七日(土)「国について・歌について」コンサートでは、林光のソングのほか「里子にやられたおけい」と「いぬふぐり」それに新作「祖母の唄」をかれのピンをくわえて演奏。

土本典昭の映画「こんにちわアセアン」の音楽も、ひとつのメロディーを中心に、なかば即興でつくる。

四月二十二日(木)にヤマハ渋谷店で30分ほどデモンストレーション。四月二十四日(土)には宇都宮「仮面館」でポーランドの歌とタ

イの歌(モンコンの作品)を中心に。

四月中には、タイの歌12曲のカセットをつくる。これはタイで発売するためのもの。日本ではいつだか未定。二月のコンサート「バンコクの大正琴」での数曲と、モンコンが森のなかでつくって発表の機会がなかった数曲。かれの音楽は頭のなかにあつて紙にはかかない。それといっしょにやるためにメロディーを数字譜でかき、それにあわせて自分のパートを即興でつくりだすやりかたをとる。

3月号のこのページにかけた予定以外に、四月一日お茶の水YWCAの三里塚・ラルザック連帯集会にて、三里塚の歌とタイの歌をうたった。

五月三日(月)「大地の唄・心のさげび」愛知県勤労会館。ここではタイの歌、日本の歌のほか、名古屋にいるわれわれの友人戸島美喜夫の「バナナ食民地」と「フィリピンの抵抗詩より」(エドガル・マラン・詩)を演奏する。

五月五日(水)三里塚労農合宿所五周年をむかえての行事に参加。

五月十日(月)新宿安田生命ホール、午後六時半から「新宿反核集会」。間にピアノ演奏

をまじえて日本の歌、ペラウの歌、タイの歌。反核の歌は替え歌か一九五〇年代の歌で、いいものがまだたくさんない。アメリカの反核コンサートも歌手のもちよる歌でなければベーターヴェンだったりするのだ。

五月十七日(月)中野文化センター「光州5月」。このコンサートはゲストの部分をのぞいて、五月二十九日(土)神戸と三十日(日)大阪でもくりかえされる。内容は本文。

先月号の編集後記にかけたポーランド「連帯」再生基金については国外にいる「連帯」の人たちとも相談して、日本の国内でできるいちばん有効な活動にあてることになるだろう。

近いうちにその活動について、また基金をあずかりうごかしてゆく委員会のメンバーを発表できるとおもう。

カンパのあて先は郵便振替で口座名・連帯再生基金実行委員会、口座番号・東京三六一九五七九。基金はいまのところ水牛楽団コンサートの収益六十六万五千九百八十円をこえていない。収支報告は基金自体の通信ができてまで「水牛通信」の誌面のどこかをかりつつける。

光州5月 コンサート解説

一九八〇年五月の10日間、自由をもとめて軍隊とたたかった人びとのためにコンサートを計画した。最近出版された「韓国抵抗歌集（地下出版復刻版）」からえらんだ歌を中心にして。この歌集には百八十曲がはいっている。民謡、讚美歌、歌曲、歌謡曲、童謡とさまざまなかたちで過去百年の抵抗史を歌で表現している。

鳥よ 鳥よ 青鳥よ
鳥よ 鳥よ 青鳥よ
緑豆の島に 下り立つな
緑豆の花が ホロホロ散れば
青舗売り婆さん 泣いて行く

（金素雲訳）

東学農民軍が日本軍の介入で敗北し、朝鮮半島の近代がはじまる。この「鳥よ」の歌は

民衆の抵抗の主題歌となった。
一九三〇年代、日帝の植民地政策のために故郷をすてて移住し、亡命する人たちが中国との国境にある豆満江をわたっていった。「いとしのあなたよ いとしのあなた いつまたかえる」と「涙にぬれし豆満江」の歌声があとを追った。

あのかもめあの子は 故郷にいるのに
何故私は 離れてくらさねばならぬ
いつそ何もかもみな捨て 帰ろうか 帰ろうか

（金慶植訳）

「帰りたい」というこの歌は、一九三〇年代につくられた芸術歌曲だった。北の放浪者が南の故郷をしのぶ歌は、いままた民族統

一へのおもいのなかで、あたらしい意味をもった。

他郷でも 住めば都 故郷となるのに
どうでもいい この身はいつも他郷ずま

一九三〇年、北海道から間道まで流行した「他郷ずまい」の根は、まだ過去のものとならず、深まるばかりだ。

しかし、いま野を奪われ
春すらも 奪われてしまった

一九二〇年代の詩「奪われし野に春は来るか」が金民基の歌でよみがえる。

一九七〇年代のはじめに大学生だった金民基の歌は学生街でうたいつたえられ、ただ一枚のこしたレコードのコピーが手から手にわ

たっていった。

「小さな蓮池」はその頃の歌
山奥のすその小さな蓮池に
いまは汚れた水だけたまり
何も住んでいない

「ソウルへゆく道」

老いた父母の 病気はながい
裏山の薬草は とりつくしちまった
でてゆくおいらのかわりに
父母だれが見る
ソウルへゆく道 なぜほそくながい

「その日」

花園にひと房の花もなく
今日がその日か その日はいつ
陽が沈む日 星が沈む日
沈んで再び昇らぬ日は

これらの歌は、若い人たちのおかれていた社会状況を諷刺し、内心の矛盾をいいあてていたのだから。

だが、金民基自身は、そうした根のないなやみにとどまっていなかった。生活現場で抑圧された人びとといっしょにくらしながら、現実の矛盾とたたかう道をえらんだ。工場や建設工事現場ではたらきながら、夜学でおしえる日々をへて、農村に住むようになった。そ

のなかから農民の歌やミュージカル「工場のともしび」がうまれた。

かれのあゆんだ道は、韓国労働運動がおり、タルチュムやマダンクツのような民衆の広場の芸術があたらしい社会的意味をもってよみがえった時代と方向をひとつにしている。幾世代もの重石だった恨をとかす日が近づいてくる。労働者たちが目ざめ、歴史の主人は自分たちであるという認識にたつて、生きるためにたたかう。

作者不詳の三つの歌は、最近の運動のなかからうまれた。「農民歌」、「女性人権の歌」、「自由なる労働者」。

以上が、コンサートの中心になる韓国抵抗歌集の部分。

民衆の生きるための運動は孤立してはいない。国外からの支援の声にはげまされ、また運動自体が国外の民衆運動を勇気づけてもいる。このおたがいの関係のなかで、いくつかの歌や音楽もうまれた。

林光の「光州5月」は80年11月に発表された。白玲と野村修のことばによる歌とピアノのための曲。

忘れるな 屋根から投げ落された兄を

乳房を突き刺されて死んだ姉

腹を裂かれた身重の母

詩人高銀は獄中で光州事態を知り、赤い囚人章を供養の花とする。

そして風すさぶ日

われら倒れるところ

そこが故郷だ

「故郷」

きょうだいま 私は西方浄土にはいきたくありません。

死んでも死んでも この国にいたいのです

「臨終」

そして尹伊桑の最新作、ピアノのための「間奏曲A」で、こまやかな音の網目細工のなかに見えかくれするA音は何を意味するのか。われらすべてがそれをめざしながら、これほど到達したいあるものをか。

モンコン・ウトックの「ロンバークン」はタイ政府軍によって焼き打ちされた村をうたう。

あたたかい心 母よ だれがはなれてい

くものか

生れ育ったふるさとをあとに

アジアの民衆のこころは、こうしてひびきあうのだ。

その日

は 存 ず の は 存 せ と ふ さ も 小 な
 就 瑞 一 に 罪 人 か び と り も い な
 あ か る ね に ち ゅ び え ら ぬ し な ぞ
 今 日 が そ の 日 が そ の 日 は い つ
 陽 が しずむ 日 ほし が しずむ 日
 しずんで ふたたび の ぼりぬ日は

小さな蓮池

ふかい やまあ く さい さま 様 すり けり いま は よごれ 花
 あかい このは は のこら すあさ て にかね のよこには
 すばり なに も すあ なり けり むかし こころは さい 存 さい
 すいけに うあ ん ては しすむ いえ の 存い こころ さま さま
 ま すん で いちと いふ さい さい の さい さい けり
 て はすい のみ-すえ の人 てしす むに さいりゆく
 ある はれた んに さいの こころに さい さい
 むは さいに あさ て しす むの-なや ま まい
 さい のは-て に さいに うあ- んに さいの にくは-くさい
 ああさ いさ わ の さいの さいの さいの さいの さいの さいの
 さいの さいの さいの さいの さいの さいの さいの さいの
 いと し-つ-さ 存に も いわ存 い て はすい けり のこ
 ふかい やまあ く さい さま 様 すり けり いま は よごれ 花
 すばり なに も すあ 存 い

自由なる労働者

われは自由なる労働者 権力はなくとも
 わがしは 労働者
 仲間を 助け
 貧乏なくとも
 富を 分け
 勝利は 我々の
 勝利は 我々の
 勝利は 我々の
 勝利は 我々の

女性人権の歌

あふく しつむ根(心)のくこりとあふく
 女性の権利を
 女性の権利を
 女性の権利を
 女性の権利を

農民歌

三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに
 三千万の農民が われらに

奪われし野に春は来るか

奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか
 奪われし野に春は来るか

韓国抵抗歌集

地下出版復刻版(原語版)

東学農民戦争より百年の抵抗史を、民謡・歌曲・歌謡曲・学生労働者の歌でつづる。
定価一三〇〇円 送料二五〇円

カセット

ポーランド

禁じられた歌

ポーランド国歌・しだれ柳・今日は会えない・秋の雨・モンテカシノの赤い芥子・埋められた武器の子守歌・明日はワルシャワ・祖国との別れ(オギンスキ)・ポーランド式料理のつくりかた・娘にあたえる歌・ヤネクウイシニエフスキは死んだ・革命(シヨパン)・ストラト(百年) 出演 水牛楽団・水木陽子・林光・高橋アキ・津野海太郎 定価二〇〇〇円 送料二四〇円

申込みは水牛編集委員会

郵便振替口座 東京四一九一七九二まで

編集後記

十年まえの「復帰」後、沖縄をでる若者たちのかずが激増した。「ゆうなの会」は、在閩東の沖縄青年たちのあつまりである。かれらは政治集会をやるかわりに、休日にアルバイトをして、そのカネで東京の各所に寄りあいの場所を確保する。デモではなく、原宿の竹の子族たちになじって、エイサーを踊る。東京にきて、はじめてサンシンをひき、エイサーを踊ったという連中がおおい。沖縄にいたときは、東京のほうを見ていた。沖縄からきた女の子たちが、東京でいちばんつらいのは電車にのることだという。ブラジルからきたモトムラさんが、本誌のインタヴューで、電車にのっている人がみんな黙りこくっている、「だれか、アタシに話しかけて!」と叫びたくなる、と語っていたのを思い出した。

「ゆうなの会」の会則をよむと、本会は沖縄出身者のあつまりだが、その趣旨に賛同する人であれば、だれでもうけいれるという条項があった。事実、若い非沖縄人のかけこみ参加がおおい。「沖縄世」への希望をささえる、つよい考えかただと思ふ。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願います。住所、氏名、電話番号、何号からということをお知らせください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第四巻第五号

一九八二年五月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントシヨップ